九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

Aurora Leigh as Barrett Browning's Defence of Poetry : Mediating between Spirituality and Modernity

平井, 裕美

https://hdl.handle.net/2324/1470508

出版情報：九州大学, 2014, 博士（文学）, 課程博士
バージョン：
権利関係：やむを得ない事由により本文ファイル非公開（3）

平井裕美（英語学・英文学）

Aurora Leigh as Barrett Browning's Defence of Poetry:
Mediating between Spirituality and Modernity
（バレット・ブラウニングによる詩の擁護としての『オーロラ・リー』:
精神性と近代性を繋ぐもの）

論文審査結果の要旨

本論文は、イギリス十九世紀の詩人エリザベス・バレット・ブラウニングによる約一万二千行の九巻からなる長編詩『オーロラ・リー』（1856）が、近代社会における詩の重要性を擁護する作品であることを解明したものである。作品では一見対立するさまざまな事項が繋ぎ合わされていて、そうした対立項の境を流動化させる詩の力が、産業革命以後、ますます流動化する社会を描く手段として力を持ち、精神性と物質性の乖離が鋭く感じられる近代社会で、詩がその両者を繋ぎ得るものであることを作品が訴えているという解釈を、本論文は提示している。

本論文は全体で三部から成り、第一部第一章ではフェミニズムの観点からの考察が主流だった研究史の中での本論文の位置づけがなされ、第二章では、詩の重要性という問題が、社会を描く手段として地位を固めつつあった小説との関連の中で考察される。第二部では第三章で、ホメロスの作者としての地位を疑問視する、当時出現した学説に対するバレット・ブラウニングの態度の考察を通して、近代社会を描く叙事詩へのブラウニングの野心が指摘され、第四章では、文学における女性の髪の色の定型的な描かれ方と比較しつつ、主人公の髪の色の設定がさまざまの対立項の中間領域にある存在としての主人公を表現するものであることが論じられる。第三部では第五章で、芸術家を象徴する三人の神話的人物を分析し、作品の描く主人公の詩人としての成長を跡づけ、語りの形式が回想風、日記風と前半と後半で大きく異なる作品が、全体として一貫していることを解明し、第六章では、労働者階級のマリアン・アールという女性との出会いが、主人公に社会との接触を可能にし詩人として大きな前進をさせたことの詳細を分析し、第七章では、マリアンとの再会が無意識のうちに抱いていた愛への恐怖から主人公を解放し、愛によって初めて可能な生きた芸術の産出が達成されたことを論じる。

『オーロラ・リー』のフェミニズムの観点からの従来の考察は、男女の対立項としてのあり方を前提としているが、本論文は作品がむしろ対立項の繋ぎ合わせを訴えるものであることを指摘する点に研究史上の大きな意義を持っている。論文全体で作品中の流体のイメージへの着目がしばしばなされ、それが作品の意義深い解釈をもたらしている。神話的人物の描写の分析、マリアン・アールの位置づけ、オーロラにとっての愛と創作の問題の考察など、本論文がバレット・ブラウニング研究に独自に大きな寄与をすると考えられる功績は数多い。さまざまな対立項の繋ぎ合わせを各章で考察しながら、その繋ぎ合わせは究極的には精神性と、物質主義的な社会の近代性とを繋ぐものとしての詩の力と結びつけられていて、論文全体のまとまりも堅固であると言える。

以上のことから、本調査委員会は本論文の提出者が博士（文学）の学位を授与されるに十分な能力を持つものであると認める。